月次報告書の病院運営に対する有用性

～課題抽出から対策の実践に向けて～

風晴 俊之[1)]　美原 盤[2)]

1)公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 事務部

2)公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院 院長

[はじめに]当院では、日次および月次報告書等、上席者に報告するための決まった仕組みは確立されていなかった。報告書作成は各部署の判断に任されており、作成している部署、していない部署、作成した報告書を提出している部署、していない部署など様々であった。そこで、業務のアウトカムを把握し病院運営に活用することを目的に、病院として標準化した月次報告書を作成し、上席者に回覧する仕組みを構築した。今回、この取り組みの有用性について報告する。

[事例 1]薬剤部：薬剤部は、薬剤購入価に関しては把握していたものの、使用薬価額については関知していないことが課題として抽出された。そこで月次報告書を作成するにあたり、事務部の協力を得て、外来、病棟別の薬剤使用量・薬価額を報告することにした。回復期リハビリ病棟など包括支払い制の病棟の薬剤費の把握、ポリファーマシー対策に関する指標として活用し、薬剤部の経営的意識向上、適切な薬物療法のあり方につながった。

[事例 2]リハビリテーション部：リハビリテーション部では、病棟ごとに担当するスタッフ1人/日あたりが算定する単位数を指標とした。2病棟有する回復期リハ病棟間で、一つの病棟は 19 単位を超えていたが、もう一つの病棟は 19 単位を下回っていた。原因はスタッフ 1 人が提供する単位数について指示および管理方法が病棟間で異なっていたためと考えた。そこで低い病棟は、もう一つの病棟と同じような管理体制とした。結果、2 病棟ともに 19 単位を上回るようになった。このことは患者への医療提供サービスの向上とともに、病院収益向上にも繋がった。

[考察]診療に直接かかわる単部署では、臨床的質の観点は持ち合わせていても経営的観点が希薄となりやすい。月次報告書というツールにより業務のアウトカムを見える化し、事務部として内容を分析して現場での対応に結びつけたことが、病院運営において極めて有用であった。